



小学生の部

最優秀賞（佐賀県推進委員会委員長賞）



たがいを支え合う社会へ



佐賀市立高木瀬小学校・六年

菜永 葉美

母が刑務所作業品を購入してきました。私は、刑務所にいる人達が作った物、と聞くとなぜか「いやだな、こわいな」と思ってしまいました。なぜこうってしまったのかは、「受刑者が作った」という偏見が私の中にあったからです。今、思うと自分はずかしくなりました。母が買ってきた作品を見ていると、一生けん命に作っている姿が思いうかびました。とても丁寧に作られていて、みんなに見せたくくなるような、心がこもった作品でした。不安だなという気持ちは、だんだんと無くなっていきました。思い込みというのはこういう事なんだと改めて気づかされました。

刑務所作業品というのは、犯罪を犯して刑務所に入っている人、受刑者が製作した製品のことで、家具、布製品、屋久杉を使って製作された生活用品など、様々な物が作られています。刑務所作業品は、矯正協会刑務所作業協力事業、CAPICというブランド名で販売されています。CAPIC製品の売上げの一部は、犯罪被害者支援団体の活動に助成、補助している事が分かりました。そこで、私達が購入する事によって、受刑者や犯罪被害者の支援に協力する事ができるのです。

刑務所作業品は、単に製品を販売するだけでなく、受刑者の社会復帰を支援する役割もあるのだと学ぶ事ができました。

犯罪の原因は、一つだけではないと思います。個人の性格や、価値観の問題だけでなく、家庭環境や、社会環境など、周りの状況も大きく影響していると思います。私は、六年生なので、一年生のお世話をしています。「ありがとう」と一年生からも、先生からも言われて、とてもうれしくて、やりがいを感じます。「感謝し、感謝される」という関係は、人とのつながりの中で大切だと思うし、「自分は、人の役に立っているんだ」と思えてきて、達成感がわいてきます。

罪を犯してしまった人は、「自分は社会に必要とされていない」と、どうしても思ってしまうと思います。そこで、家族や友達、先生、そして、地域の人達など、大切な人々とつながり、信頼し合える関係を築く事で、犯罪という道を選ぶ人も少なくなっていくと思います。

私が刑務所作業品を通して改めて学んだ事は、「思い込み」を減らしていく事です。私は、刑務所作業品そのものを知らず、「いやだな、こわいな」と思ってしまった。思い込みというのは、偏見や差別を生み出してしまふ、私はそう思います。そこで思い込みを減らしていけるように「知る事」も大切です。私が持ったような偏見は少しずつ減っていき、支援につながっていくと思いました。

様々な人生を歩んできた人々が、それぞれを理解し合うのは、むずかしいと思います。けれども、おたがいを支え合う事によって、誰もが「自分はこの社会に必要なんだ」と思え、犯罪のない明るい社会へと前に進んでいけると思いました。

罪を犯した人も、再び、立ち上がろうとしています。その様な人々を受け入れ、寄りそい合い、はげましてくれる人がたくさんいる、そんな社会を目指していきたいです。そして、その一員に私もなれるように、これからも、成長し続けたいと思いました。

誰もが明るい社会の一員になれるように。